

# 大学入試改革のその先へ 先進的な中等教育を実践



【写真上】「黒板の無い教室」では、黒板を使った授業と比較して2～3倍のスピードで授業が進んでいる

【写真右】生徒全員にiPad Proとタッチペンが配付される



瀧野川女子学園中学高等学校では、授業で鉛筆を使わない。教材もノートも課題プリントも完全にデジタル化されており、タブレットとタッチペンで授業に参加するからだ。授業効率を上げるのと同時に、リアルタイムでの情報共有によって、深い学びへとつなげている。こうした教育の魅力について、理事で副校長の山口龍介先生に伺った。

## A4サイズのタブレットが 授業のあり方を完全に変えた

同校では、生徒全員がA4サイズのタブレット (iPad Pro 12.9) とタッチペン (Apple Pencil) を持っている。授業は、オリジナルのデジタル教材と、タブレット上のノートを使って進められる。教室に黒板はなく、大型のスクリーンが2面あるだけだ。そこに、資料や教材を映し出す。授業中の生徒の作業はすべてタブレット上での「デジタル手書き」によって行われる。

ノートは教員も含めて瞬時にリアルタイムで全員に共有されるため、他の生徒の閃きや思考過程を参考にすることで、短時間で理解を深めていくことができる。教員も生徒全員の理解の度合いを把握できるため、一人ひとりにきめ細かなアドバイスができる。

「教材から課題プリントまでフルデジタル化したことで、板書を写す時間や提出物のやりとりを使う時間を大幅に短縮できます。ですから、知識・理解に関する部分の効率は3倍になりました。そこで生まれた余裕を、探究や議論、表現活動などの時間に当てています。逆にいえば、そういう時間を作るためにICTを活用しているのです」と、山口龍介副校長は語る。

A4サイズ



全ての授業でiPadを使用し、ファシリテーション型の教育を行っている

ほとんどの紙のノートと同じ使い方ができる。しかも、全員で1つのノートに書き込むこともできるため、協働学習にも向いており、文科省が提唱する「主体的・対話的で深い学び」が可能になる。

「授業がアクティブで、楽しいので、結果的に生徒の自宅学習の時間も増えました。学び方が効率的になるため、部活動に打ち込むこともできます。デジタル手書きの授業は、大きな可能性を持っています」(山口副校長)

**仕事を創る力を育む  
「創造性教育」を重視**

授業をフルデジタル化することで生まれる余裕は、創造性を育む教育の時間にも当てられる。同校が設立時に目指したのは、「社会に出て、自分で仕事をしてくれる女性」の育成だった。その理念が、現在の学校独自設置科目「創造性教育」にも受け継がれている。

この授業では、国際的な評価の高い「デザイン思考」をベースに創造性を育む教育を行っており、高1では世の中にない新商品を企画するコンペを行っている。高2になると「事業化」がテーマとなり、チームで会社を起こし、オリジナル商品を企画・製作・販



- 1 高1での商品企画コンペティションの様子
- 2 高2の事業化実習ではあかつき祭(学園祭)で取り組む企画を新しい事業と捉え、起業の一連の流れを経験する
- 3 ハワイ諸島修学旅行では、オリジナル商品のチャリティーバザーを開催

売し、利益を確定して会社を解散するところまでを経験する。財務や投資といった考え方を学ぶと同時に「海外事業展開」までも視野に入れる。ハワイ諸島への修学旅行中に、ハワイ大学のキャンパスで、オリジナル商品のチャリティーバザーを開催し、利益を全額、現地の教育基金に寄付しているのだ。

「創造性教育によって、新しい仕事を創り出すことの楽しさや苦しさ、チームでやり遂げることの喜びを、肌で実感できます。これからの時代にこそ求められる力を育むことができていくと思っています」(山口副校長)

効率の良い授業展開と、創造性教育による起業家精神の育成は、大学も含めた教育機関の今後の大きな潮流だ。瀧野川女子学園中学高等学校は、まさにその最先端を走っているといえるだろう。

